

円空の彫刻芸術（4）—東北・北海道の観音菩薩像

The Sculptural Art of Enkū (4) — The Statues of Kannon Bodhisatva in the Tohoku and Hokkaido Regions

野村 幸弘

Yukihiro Nomura

はじめに

現在、東北・北海道で確認されている円空の作品は、秋田12体、青森18体、宮城1体、山形1体、北海道51体の計83体である。⁽¹⁾ そのうちの10体は十一面観音像で、これらについては、すでに拙論で詳細な様式分析を行い、その制作順序の仮説を提出している。⁽²⁾ そのほか、聖観音立像（北海道八雲町、根崎神社）や釈迦如来立像（青森県むつ市、常楽寺）など、比較的大きな仏像をのぞき、東北・北海道における多くの円空作品は、像高わずか数センチから数十センチの観音菩薩坐像、阿弥陀如来坐像である。それらは軽量であるため、持ち運びが簡単で、現在、置かれている場所以外で制作され、その後、さまざまな理由により、所有者や所蔵先を変えたもののがかなりある。また十一面観音像とちがって、観音菩薩坐像、阿弥陀如来坐像は、様式にそれほど大きな変化が見られず、損傷が激しかったり、摩滅していたり、台座が切り取られたり、後世に修復が施されたりして、保存状態が悪いため、様式の変遷を辿ることが難しい。しかも一般公開されていないものや、調査の許可が下りない作品も少なからずある。したがってここでは、これまで調査、撮影できた円空作品に限り、様式分析を行って、その特徴を明らかにしたい。考察の対象とする円空作品は、以下の通り、秋田7体、青森7体、北海道22体の計36体である。⁽³⁾

秋田

観音菩薩坐像（大仙市・大菌寺）
 観音菩薩坐像（由利本荘市・大泉寺）
 観音菩薩坐像（由利本荘市・本荘郷土資料館）
 観音菩薩坐像（秋田市・個人蔵）
 観音菩薩坐像（秋田市・當福寺）
 阿弥陀如来坐像（男鹿市・教育委員会歴史資料収蔵庫）
 阿弥陀如来坐像（北秋田市・大太鼓の館）

青森

観音菩薩坐像（西津軽郡鰺ヶ沢町・延寿院）
 観音菩薩坐像（青森市・元光寺）
 観音菩薩坐像（青森市・西光院）
 観音菩薩坐像（青森市・浄満寺）
 観音菩薩坐像（東津軽郡蓬田村・正法院）
 観音菩薩坐像（東津軽郡外ヶ浜町・福昌寺）
 観音菩薩坐像（東津軽郡外ヶ浜町・義経寺）

北海道

聖観音坐像（伊達市・有珠善光寺）
 観音菩薩坐像2体（寿都郡寿都町・海神社）
 観音菩薩坐像（函館市・称名寺）
 観音菩薩坐像（苫小牧市・樽前神社）
 観音菩薩坐像（檜山郡上ノ国町・北村地藏庵）
 観音菩薩坐像（檜山郡上ノ国町・光明寺）
 観音菩薩坐像（檜山郡上ノ国町・旧笹浪家）
 観音菩薩坐像（檜山郡江差町・観音寺）
 観音菩薩坐像（檜山郡江差町・柏森神社）
 観音菩薩坐像（爾志郡乙部町・鳥山神社観音堂）

観音菩薩坐像（爾志郡乙部町・龍寶寺）
 観音菩薩坐像（爾志郡乙部町・元和八幡神社）
 観音菩薩坐像（爾志郡乙部町・本誓寺）
 観音菩薩坐像（爾志郡乙部町・三ツ谷研修会館）
 観音菩薩坐像（松前郡福島町・福島町役場）
 観音菩薩坐像（広尾郡広尾町・禅林寺）
 観音菩薩坐像（山越郡長万部町・平和祈念館）
 観音菩薩坐像（北斗市・上磯八幡宮）
 観音菩薩坐像（北斗市・曹溪寺）
 観音菩薩坐像（亀田郡戸井町・汐首地藏堂）
 観音菩薩坐像（茅部郡砂原町・権現山内浦神社）

秋田の観音菩薩坐像

秋田に残る12体の円空作品のうち、調査ができたのは7体である。ただ當福寺のものは顔が大きく改変され、本荘郷土資料館のものは左肩が欠損し、秋田市の個人蔵のものは右頬に大きな傷があり、顔全体の摩滅が著しい。

また男鹿市教育委員会歴史資料収蔵庫のものは、全身が漆で塗り固められている。⁽⁴⁾ したがって円空自身による当初の表現が比較的良好に残っているのは、大藪寺、および大泉寺所蔵の観音菩薩坐像と、大太鼓の館所蔵の釈迦如来坐像の3体である(図1・2・3)。これら3体のなかで、大藪寺の蓮座から下の台座は完全に別のものに取り換えられているうえに、額と首には装身具が付け足され、大太鼓の館のものは顔と胸に金箔の貼られた跡が所々残っているため、保存状態が良好なのは大泉寺のものしかない。



図1 円空《観音菩薩》大藪寺(秋田県大仙市)

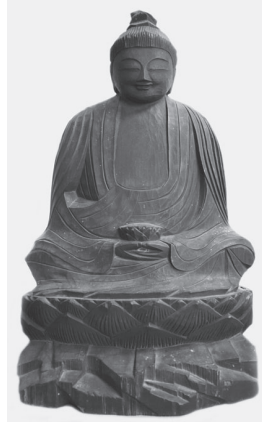


図2 円空《観音菩薩》大泉寺(秋田県由利本荘市)



図3 円空《阿弥陀如来》大太鼓の館(秋田県北秋田市)

大藪寺の観音菩薩坐像(図1)は、像高わずか11.5cmで、手のひらに乗るくらい小さく、48.6cmの大泉寺の観音菩薩坐像(図2)、43cmの大太鼓の館の阿弥陀如来坐像(図3)と比べると、とくに衣の襞の彫りに大きな違いが認められる。しかしながら顔を比較すると、眉と目が若干、左右に吊り上がり、三角錐状の鼻など、共通の特徴をもっていることが分かる(図4・5・6)。そしてその目鼻立ちの特徴は、やはり秋田県能代市の龍泉寺にある円空の十一面観音像(図7)にも見てとれる。したがって、これが秋田における円空仏の大きな特徴と言えるだろう。

(4)



図4 円空《観音菩薩》(部分)大藪寺(秋田県大仙市)



図5 円空《観音菩薩》(部分)大泉寺(秋田県由利本荘市)



図6 円空《阿弥陀如来》(部分)大太鼓の館(秋田県北秋田市)

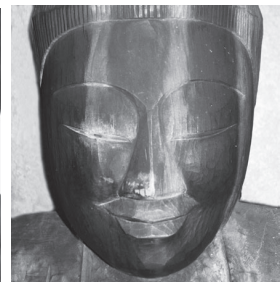


図7 円空《十一面観音》(部分)龍泉寺(秋田県能代市)



図8 円空《釈迦如来》(部分)天徳寺(岐阜県関市)



図9 円空《観音菩薩》(部分)瑞巖寺(岐阜県揖斐郡揖斐川町)

ここで注目したいのは、円空が東北・北海道の旅に出る前に制作した、岐阜県関市の天徳寺に残る釈迦如来座像(図8)である。この像は蓮座の形状からも、1665(寛文5)年頃の円空の初期作とされているが、その顔の特徴は、秋田の円空仏と同じく、眉と目が吊り上がり、眉から鼻筋にかけて、くっきりとしたY字形を作っていることである。⁽⁵⁾ 鼻梁と鼻頭が鋭く尖っているのが印象的である。秋田の円空仏のなかでも、とくに大藪寺の観音菩薩坐像(図4)の顔が、円空初

期の釈迦如来坐像 (図 8) に酷似している。とすれば、円空が東北・北海道の旅先で最初に制作した現存像は、秋田、大藪寺の観音菩薩坐像ということになるだろう。

ただし、これまでの通説では、制作順序が逆で、円空が旅の終わりに作ったのが秋田の諸仏像ということになっている。(6) この問題について、私はすでに東北・北海道に残る円空作の 10 体の十一面観音像を様式分析した結果、秋田から北上して青森の津軽半島から北海道へ渡り、帰路は青森の下北半島に戻る、という仮説を出している。(7) したがって、この新たな仮説は、秋田の観音菩薩坐像の様式が、東北・北海道への旅以前に制作した岐阜の初期像にきわめて近いという事実によって、さらに補強されたとすることができる。

そこで次に、青森、北海道に残る円空作品の様式を分析する前に、円空が旅から戻った後に、岐阜で作った作品を見ておきたい。それは岐阜県揖斐郡揖斐川町の瑞巖寺にある観音菩薩坐像 (図 9) である。その眉は吊り上がり、穏やかな円弧を描き、両眉はやや離れて、初期作のような鋭角的な鼻梁線は完全に消えている。

旅の前に作られた岐阜県関市、天徳寺の釈迦如来坐像と、旅の後に作られた岐阜県揖斐川町、瑞巖寺の観音菩薩坐像の目鼻立ちを、下図 (図 10・11) のように輪郭線だけで描き起こしてみると、その様式の変化がはっきりと確認できる。

この様式の変化の過程のなかに、円空が東北・北海道で制作した諸仏像を位置づけることができれば、それがそのまま円空の旅のルートを示すことになるだろう。



図 10 円空《釈迦如来》(部分) 天徳寺 (岐阜県関市)



図 11 円空《観音菩薩》(部分) 瑞巖寺 (岐阜県揖斐郡揖斐川町)

青森の観音菩薩坐像

旅先の秋田で制作を開始した円空は、次に北上して青森へ向かったと思われる。まず青森で調査した 7 体のうち、青森市の元光寺と青森県東津軽郡外ヶ浜町の福昌寺の観音菩薩坐像は、顔の損傷が激しく、ほとんど原形を留めていないので、考察の対象から外さざるを得ない。(8) 残り 5 体の観音菩薩坐像の顔の特徴を見てみると、どれもほぼ区別がつかないほど似通っているため、これら 5 体は比較的短期間のうちに立て続けに制作されたと考えられる (図 12・13・14・15・16)。したがって、円空が青森のどの道を通って北上したのかを特定することは非常に難しい。仮に、宗福寺 (現在の秋田県大館市) を最後に秋田を後にしたとすれば、おそらくそこからはまず弘前に向かったにちがいない。さらに北へ移動して青森市の西光院と元光寺へ、そして陸奥湾に出て油川の浄満寺から海岸沿いを北へ向



図 12 円空《観音菩薩》(部分) 延寿院 (青森県西津軽郡鰺ヶ沢町)



図 13 円空《観音菩薩》(部分) 西光院 (青森市浪岡)



図 14 円空《観音菩薩》(部分) 浄満寺 (青森市油川)



図 15 円空《観音菩薩》(部分) 正法院 (青森県東津軽郡蓬田村)



図 16 円空《観音菩薩》(部分) 義経寺 (青森県東津軽郡外ヶ浜町三厩)

かい、東津軽郡蓬田村の正法院、外ヶ浜町の福昌寺、最後に津軽半島最北端の三厩の義経寺に辿り着いただろう。

問題は、このルートからやや離れる津軽半島西側の鯉ヶ沢町、延寿院の観音菩薩坐像である。円空は弘前から北へ抜けて陸奥湾に出る前に西方向の延寿院に先に行ったのか、それとも義経寺まで行き着いた後、津軽半島の先端から西回りに延寿院まで南下して、そこから舟で北海道の松前に渡ったのか、そのどちらかのルートを辿ったのだろう。鯉ヶ沢町、延寿院の方が秋田での造像に近く、次に見るように、義経寺の観音菩薩坐像が道南のものと同顔が類似しているの、前者のルートを取ったのかもしれない(次頁の地図を参照)。

北海道の観音菩薩坐像

北海道で調査した22体のうち、広尾町の禅林寺、有珠善光寺、乙部町の龍寶寺、北斗市の曹溪寺、江差町の柏森神社、乙部町の本誓寺と鳥山神社の円空仏は顔がひどく損傷し、乙部町の三ツ谷研修会館と戸井町の汐首地藏堂のものは、後世の改変により、顔を含め全身が着色されているため、考察の対象から除外する。⁽⁹⁾ 残る13体のなかで、青森の円空仏の様式にもっとも近いのは、北海道函館市の称名寺と福島町役場の観音菩薩坐像である。両者の観音菩薩坐像の顔は、とくに青森県沢外ヶ浜町三厩の義経寺との類似が著しい(図18と19・20を比較)

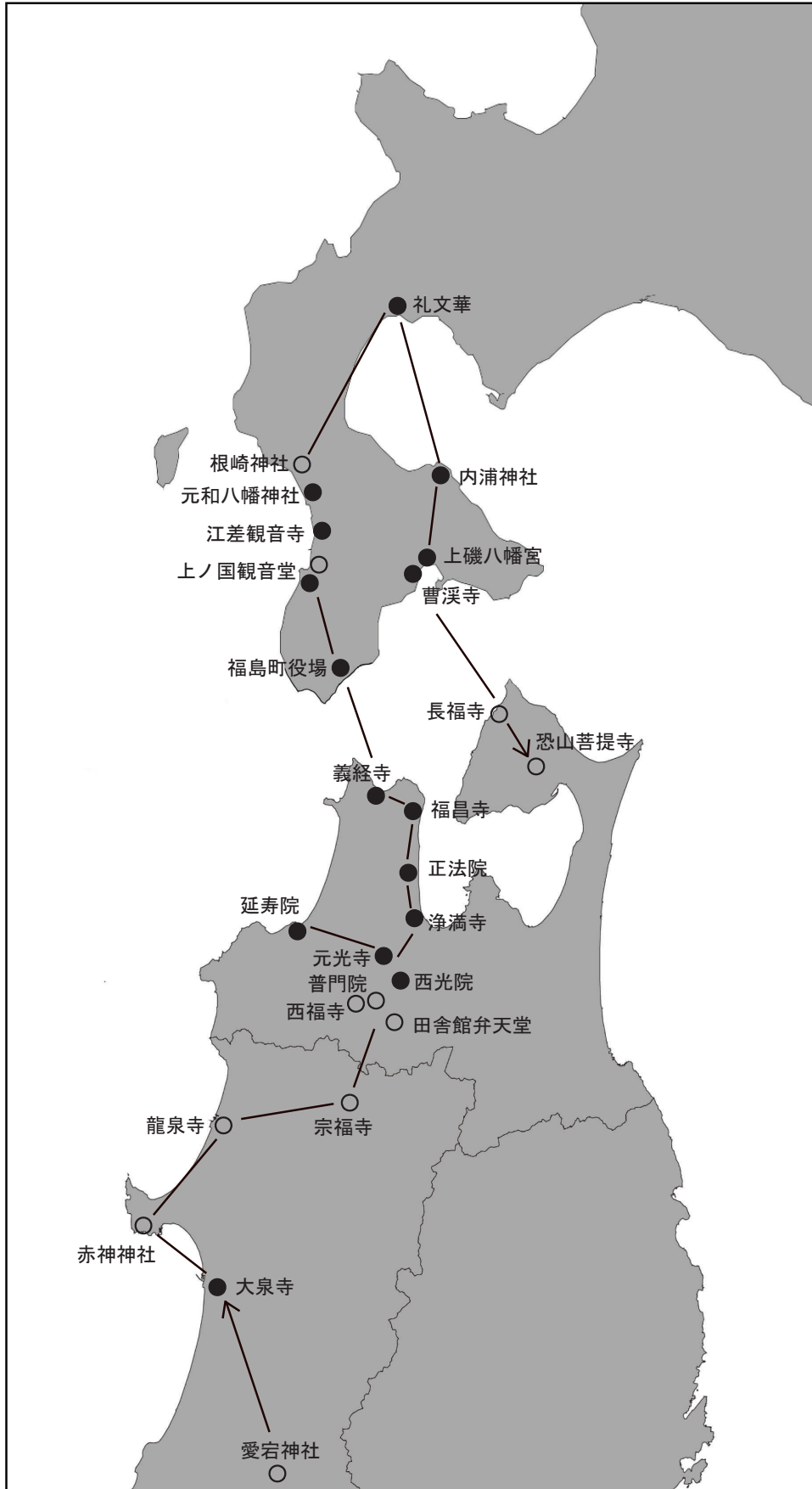


図18 円空《観音菩薩》(部分) 義経寺 (青森県東津軽郡外ヶ浜町三厩) 図19 円空《観音菩薩》(部分) 称名寺 (北海道函館市) 図20 円空《観音菩薩》(部分) 福島町役場(北海道松前郡福島町)

北海道函館市、称名寺の観音菩薩坐像が青森の津軽半島に残る円空仏の様式に似ていることは、すでに多くの研究者によって指摘されている。ただし、これまで考えられてきた制作順序は、北海道が先で、円空がそこから津軽半島に戻って来て、延寿院や義経寺の諸仏を作ったということになっている。⁽¹⁰⁾ しかし先に見たように、秋田の円空仏の方が、旅に出る前に岐阜で作ったものに近いので、順序は逆になり、円空は津軽半島から北海道へ渡ったにちがいない。⁽¹¹⁾ その後、おそらく円空は北海道の松前から道南の日本海沿岸を北上し、上ノ国、江差、乙部へ移動したと考えられる。それらの地で円空が制作した観音菩薩坐像を南から北へとならべてみると、下図のようになる(図21・22・23・24)。これら4体を津軽半島の最北端、および北海道の最南端に残る円空仏(図18・19・20)と比べると、鼻がやや長くなり、頬が少し広がっている。そのためか、表情がいくぶん穏やかになったように見える。道南を北上するなかで、顔の表現がわずかではあるが変化しているのである。そして八雲町の根崎神社に円空の聖観音立像が現存しているので、円空は乙部から八雲町までさらに北へ移動したのだろう。



図21 円空《観音菩薩》(部分) 光明寺 (北海道檜山郡上ノ国町) 図22 円空《観音菩薩》(部分) 北村地藏庵 (北海道檜山郡上ノ国町) 図23 円空《観音菩薩》(部分) 観音寺 (北海道檜山郡江差町) 図24 円空《観音菩薩》(部分) 元和八幡神社 (北海道爾志郡乙部町)



- 礼文華
- 根崎神社
- 元和八幡神社
- 江差観音寺
- 上ノ国観音堂
- 内浦神社
- 上磯八幡宮
- 曹溪寺
- 福島町役場
- 長福寺
- 恐山菩提寺
- 義経寺
- 福昌寺
- 正法院
- 浄満寺
- 延寿院
- 元光寺
- 普門院
- 西光院
- 西福寺
- 田舎館弁天堂
- 龍泉寺
- 宗福寺
- 赤神社
- 大泉寺
- 愛宕神社

その次に円空が仏像を制作したのは、虻田郡礼文華の小幌洞窟においてである。菅江真澄の『えぞのてふり』によれば、寛政3 (1791) 年6月7日に「ケボロオイ (小幌) の岩屋観音」に5体の円空仏があったと書いている。その5体のなかで、現在、所蔵が確認できる円空仏は、有珠善光寺の聖観音坐像、苫小牧市樽前神社の観音菩薩坐像、釧路市巖島神社の観音菩薩坐像である。⁽¹²⁾ 有珠善光寺の聖観音坐像は、背銘に「うすおく乃院小嶋 江州伊吹山平等石之僧内 寛文六年丙午七月廿八日 始登山 円空」とあり、作者と制作年が明記されている貴重な作例となっている。ということは、東北の秋田から造像が始まり、青森、道南までの旅の途上で作った仏像は、すべて有珠山に登頂した後の寛文6 (1666) 年7月28日の聖観音像以前に制作されたことになる。

現在、寿都郡寿都町の手神社に残る2体の観音菩薩坐像の背銘には、「いそや乃たけ らいねん乃たけ 寛文六年丙午八月十一日 初登 内浦山 円空」と書かれており、内浦山、すなわち現在の駒ヶ岳に登った後、作ったことが分かる。この間、約2週間しか経っていないので、樽前神社と手神社の観音菩薩坐像3体の顔を比べると、非常に似通っている (図25・26・27)。駒ヶ岳の北側の麓にある内浦神社の観音菩薩坐像 (図28) も、その顔は樽前神社と手神社のものに非常に似ているので、同じ頃に制作されたと考えられるだろう。

こうして目鼻立ちの表現の特徴のわずかな変化から、円空が秋田から青森の津軽半島を通って北海道に渡り、道南の西海岸を北上して有珠山に登頂した後、駒ヶ岳にも登り、上磯八幡宮 (図29) や曹溪寺でも観音菩薩坐像を彫って、函館辺りから下北半島へと南下したというルートが想定できるだろう。そしてこのルートは、すでに円空の十一面観音像の様式変化にもとづいて導き出したルートともびったり一致する。



図25 円空《観音菩薩》(部分) 樽前神社 (北海道苫小牧市) 図26 円空《観音菩薩》(部分) 手神社 (北海道寿都郡寿都町) 図27 円空《観音菩薩》(部分) 手神社 (北海道寿都郡寿都町) 図28 円空《観音菩薩》(部分) 内浦神社 (北海道茅部郡砂原町) 図29 円空《観音菩薩》(部分) 上磯八幡宮 (北海道北斗市)

耳の表現

以上、見たように、顔の表現は、その変化の過程をある程度たどることができたが、その他の部位については変化に乏しく、比較しても個々の仏像に大きな違いを見出すことは難しい。たとえば、耳の彫り方であるが、保存されている状況によって、側面の写真撮影ができない場合は、その部分を考察の対象にできないし、また耳は損傷、欠落していることが多いので、調査したすべての仏像の耳の彫り方を詳細に比較検討することも残念ながらできない。

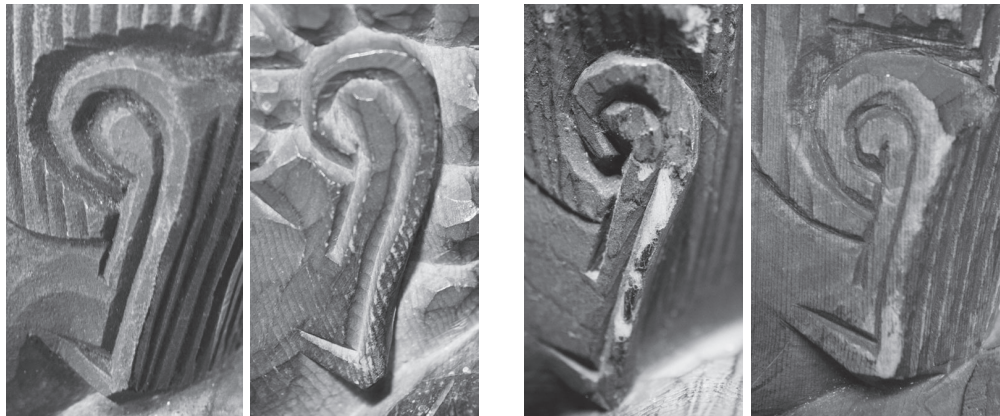


図30 円空《観音菩薩》(部分) 大泉寺 (秋田県由利本荘市) 図31 円空《釈迦如来》(部分) 天徳寺 (岐阜県関市) 図32 円空《観音菩薩》(部分) 曹溪寺 (北海道北斗市) 図33 円空《観音菩薩》(部分) 瑞巖寺 (岐阜県揖斐川町)

ただし、東北で最初に制作したと考えられる秋田の大泉寺と、北海道最後の曹溪寺の観音菩薩坐像の耳を比較すると、やはりそこにははっきりとした違いが認められる (図30・32)。連続する

個々の仏像間の差異は、見分けることができないほど微細なのだが、旅の初めと終盤とを比較すると、様式が確実に変化していることが分かる。数週間ほどのタイムスパンでは気づかない違いが、数か月から十数か月経つ間にははっきりと目に見えるようになるのである。秋田、大泉寺の観音菩薩坐像の耳は、耳輪脚の先が尖り、耳輪が大きく幅が狭いのに対し、北海道、曹溪寺のものは耳輪がやや小さくて幅が広く、全体的に彫りが浅くて平面的である。

そして、ここが重要な点であるが、円空が旅に出る前に作った岐阜県関市、天徳寺の釈迦如来像の耳の形が、秋田、大泉寺の観音菩薩坐像のそれに似ていることである (図 30・31)。また北海道滞在の終盤に作ったと考えられる曹溪寺の観音菩薩坐像の耳は、旅から戻った後に岐阜で作った揖斐川町、瑞巖寺のものに受け継がれているのである (図 32・33)。このように顔の表現と同じように、耳の彫り方のちがいによっても、東北・北海道における円空の旅路は、秋田に始まり、青森、北海道からふたたび青森に戻ったことが裏付けられるのである。

手の表現

最後に蓮形装飾の鉢を持つ手の表現に注目したい。この部分も耳と同様、摩滅しているものが多く、彫り方にもほとんど変化がないので、様式の違いを見極めるのが非常に難しいのだが、それでも旅の最初と最後の仏像でそれらを比較すると、やはりわずかながら違いが確認できる。秋田の大泉寺の観音菩薩坐像の手は、太い左親指と人差し指の付け根の角度、鋭角的な彫りによる立体感などの点で、旅に出る前の岐阜県関市、天徳寺のものによく似ている (図 34・35)。そして北海道の上磯八幡宮の観音菩薩坐像の手は、親指の先がわずかに下にさがることで、人差し指との重なりが扁平になっている点で、旅から戻った岐阜県揖斐川町、瑞巖寺のものにつながっている (図 36・37)。

このように、十一面観音像とはちがって、観音菩薩坐像の様式上の変化を考察する部位は、顔、耳、手の3点に限られ、しかもその変化の過程はかならずしも明確ではないが、だからと言って、まったく変化しなかったわけではない。それらの部位の様式を検討しても、そこにはつねに秋田→青森→北海道→青森という制作順序が浮かび上がってきたのも事実である。青森の下北半島から南下した円空は、宮城の瑞巖寺で釈迦如来坐像を制作したが、その像は円空の次の表現段階を予感させるものとなっている。

岐阜に戻った後も、天徳寺のように、まだ北海道での造像の継続が見られる作品があるものの、円空の芸術形成期は東北・北海道の旅を終える時期と重なりながら、早くも次の芸術探究期へと入って行くのである。



図 34 円空《観音菩薩》(部分) 大泉寺
(秋田県由利本荘市)



図 35 円空《釈迦如来》(部分) 天徳寺 (岐阜県関市)



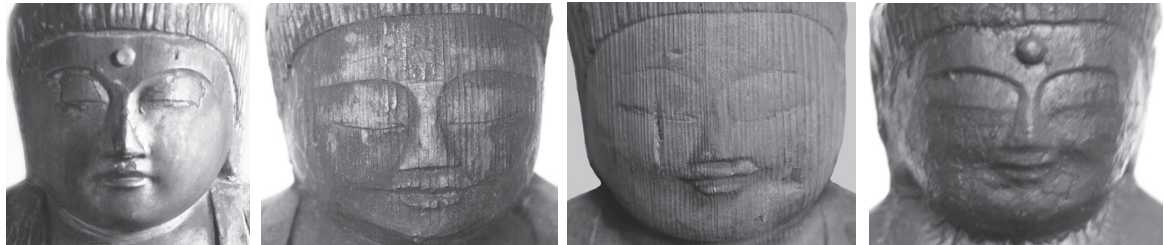
図 36 円空《観音菩薩》(部分) 上磯八幡宮
(北海道北斗市)



図 37 円空《観音菩薩》(部分) 瑞巖寺 (岐阜県揖斐川町)

註

- (1) 2015年2月現在の神仏像数である(小島梯次『円空と木喰』東京美術、2015年、162頁)。
- (2) 拙論「東北・北海道における円空の旅路」『円空研究』33 円空学会 2019年 27-36頁、および「円空の彫刻芸術(3) - 東北・北海道の十一面観音像」『岐阜大学教育学部研究報告 - 人文科学』第68巻 第2号 2020年 85-94頁。
- (3) 調査・写真撮影を許可していただいた以下の所有者、管理者の方々に厚く御礼申し上げます。秋田：大藪寺・大泉寺・本荘郷土資料館・當福寺・男鹿市教育委員会・大太鼓の館・北秋田市教育委員会。青森：延寿院・元光寺・西光院・浄満寺・正法院・福昌寺・義経寺。北海道：有珠善光寺・寿都神社・寿都町教育委員会・称名寺・樽前山神社・上ノ国教育委員会・観音寺・柏森神社・乙部町公民館・福島町役場・禅林寺・平和祈念館・上磯八幡宮・曹溪寺・函館市汐首町内会・権現山内浦神社。また図8の釈迦如来坐像は、岐阜県関市の天徳寺、図9の観音菩薩坐像は、岐阜県揖斐川町の瑞巖寺のご住職の許可を得て、筆者が撮影したものである。ここに謝意を表します。
- (4) 下図に示すように、後世の補修や摩滅により、当初の様式を留めていない。



円空《観音菩薩》(部分) 當福寺 (秋田県秋田市) 円空《観音菩薩》(部分) 郷土資料館(秋田県由利本荘市) 円空《観音菩薩》(部分) 個人蔵 (秋田県秋田市) 円空《観音菩薩》(部分) 男鹿市教育委員会 歴史資料収蔵庫(秋田県男鹿市)

- (5) 岐阜県関市、天徳寺の釈迦如来坐像の蓮坐の左右には出っ張りがあり、これが円空初期の作風の特徴の一つとなっている。この出っ張りは、東北・北海道の円空仏には見られない。ただ、これは側面から見ると分かるのだが、出っ張りというより、レリーフ状に材の前面にだけ蓮の葉を彫っているので、むしろ彫り残しの部分と見なした方が正確だと考えられる。
- (6) 笠原幸雄「東北の円空仏」『円空研究』2、円空学会編、2004年、83-89頁。この論文では、東北像の様式が一定して変化が認められないのに対して、北海道像は一定せず、「東北像の完成形式に達する前段階の推移を示す」と見なし、北海道像が先で、その後、東北像が制作されたとしている。しかし、この様式分析は衣の表現だけに限られ、顔の表情など、ほかの部分の様式の変化についてはまったくは言及されていない。この後、考察するように、東北像でも秋田から青森にかけて様式にわずかな変化は見られるし、また北海道像も、松前から道南の西海岸、有珠、函館へと、様式は少しずつ変化している。
- (7) 註(2)の拙論を参照。
- (8) 下図のように、原形を留めないほど、顔の傷みが非常に激しい。



円空《観音菩薩》(部分) 元光寺 (青森県青森市) 円空《観音菩薩》(部分) 福昌寺 (青森県東津軽郡外ヶ浜町)

(9) 下図のように、7体は顔が損傷し、2体は全身が塗装、着彩されている。



禅林寺

有珠善光寺

龍寶寺

曹溪寺

柏森神社

本誓寺

鳥山神社



汐首地藏堂

三ツ谷研修会館

(10) たとえば、丸山尚一『新・円空風土記』里文出版、1994年、57-60頁。

(11) この順序は、津軽藩庁日記の『御国日記』に、円空が寛文6(1666)年1月26日に退去を命じられ、弘前から青森へ向かい、そこから北海道の松前へ渡ると記載されていることと合致する。

(12) 堺比呂志『円空仏と北海道』北海道出版企画センター 2003年、122-123頁。

* 本研究は、科学研究費の助成による基盤研究C「円空彫刻の全作品カタログの作成」(課題番号16K02264)の成果の一部である。

